

ること二年の制作である。

ただこの像の光背には飛天群を付置することなく、また火焰光中の化佛も省略されてゐる。このような單純化の傾向は、この像の大きさにも關係するであらうが、いま最も年代の古い景四年銘像に比較して、形制は忠實にその傳統を保ちながら、全體に穩和な表現となり、細部の技法に繊細な配心が見られる。例へば本尊頭光を細かく魚子地を打ち、陽刻の同心圓文、唐草文を浮上がらせ、身光の兩側では、おなじく魚子地として、たがね彫りの未敷蓮華をその間に配して、伸びのびとした繪畫的な表現となつてゐる。魚子打は臺座の伏蓮華三重の各蓮片の縁にも見られ、更に臺座下框上面に蓮片の縁邊に施される。これら魚子打ち、火焰光のたがね彫りは、裝飾的な美しさを添へるもので、わが國では、やや時代下つていはゆる白鳳期に流行する手法に他ならない。このような見地からも于支一巡を上して年代付けすることは不可能であらう。

像の童顔らしい柔和な相貌は、齊隋に連なるものであるが、左右に張つた、線に中尊に著しい衣文の處理は北魏、東魏の金銅佛の傳統をよく殘すものである。全體の印象として、光背とそれに付した兩脇侍像と、中尊は別鑄であるが、その兩者の調和は完全な感があり、高く盛上がった臺座の形式は類例乏しく目新しい。しかし、中尊と臺座が現在密着してをり、これも一鑄かと思はれ、もとより同時の制作であることは疑をいれない。この臺座形式については、筆者論文追記で北齊天保七年銘像の先例あることに言及した。

發願者である寶華その人については未詳、おそらく女性名と推定される以上に出でず、その寶華にとつて亡父である趙□人の第二字も判讀困難であり、汎く江湖の垂教を仰ぎたく希ふところである。

出土地に關しては湖南線沿線と傳聞し、南鮮おそらく百濟系と考へられるが蛇足ながら付言すれば、この一光三尊佛光背の輪郭も、筆者論文で記述した如く、下邊に於いて、引締まり、かの景四年銘像、建興四年銘光背、王延孫造光

背と共通することを指摘して置きたい。

(熊谷 宣夫)

五 聖觀音菩薩立像

カヤ材 像高 一六六糎

岡山 明王寺 藏

岡山縣明王寺の聖觀音菩薩像は、かねがね古様をもつ彫像として注目していたが、今回調査の機會にめぐまれたので、その結果をここに紹介する。

本像は、像高一六六糎。カヤ材の一木彫で、兩腕は別木、左手は肘にてはぎ前膊はさらに肘の付根で一材をおぎなう。右手も手首の部分に別木をはぎつけている。蓮肉も本體とは別で、足柄もまた後補のものになつてゐる。本來は、あるいは蓮肉とも共木の像であつたかも知れない。また、現在、左手が著しく外側を向いてゐるが、これは肘部の補材の接續がゆるんでしまつたため、當初はもつと左手は内側をむき、恐らく寶瓶をとつていたものではないかと思われる。

次に、後補及び缺損の部分について述べると、臺座、光背は後補。また正面に垂れる天衣の一部、右の耳の外郭、背板の一部はあとであるが、他はおおむね當初の様式をとどめてゐる。手指は、左手第一、第四、第五指は缺、第二指も後補のものにかわつてゐる。右手は、第三、第五指を缺くが、兩手とも曼網相のあるのは、菩薩像では珍しい。左足指も、今日では第三指以下を失つてゐる。ただ、この像は、現在見る如き素木の像であつたか、あるいは彩色像であつたかは不明である。

本像は、天冠臺の上の邊より、裳下まで背面より大きく内割をほどこし、背板をあてがう。背板も下邊及び腰下の部分は、後補の材でおぎなつてゐるが、大部分は當初のものである。

次に本像の作風をみよう。この觀音像は、直立の姿に、下半身に腰裳をつける菩薩形としては通有のものであるが、各部をみると、きわめて特色ゆたかな



挿圖 1 聖觀音菩薩像 上半身
岡山 明王寺 藏

挿圖 2 同像 側面

ものであることが分る。
頭部からそれをみてゆくと、寶髪を飾り紐の如きものでしぼり、寶髻を茸形に作っているのも珍しい。天冠臺の下に出ている髪毛は、耳の前上で、左右とも曲線をえがくところは、法華寺の十一面觀音像や、山形縣寶積院の十一面觀音像等と共通し、本像の制作年代の推定に役立つ。



挿圖 3 同像 背面

挿圖 4 同像 斜側面

やや笑みをふくんだ面相も、前方につき出した小さな顎等も古様である。また、胸にはつきりと乳首を表現しているのも、あまり例がない。腰裳をたくしあげたようなつけ方、裳の上邊に一部みえる飾帯、また天衣や裳の隨所に刻まれた旋轉文、彫りの深い衣文線、背面の衣文の自由な刻み方等の特色は、平安初期彫刻にしばしば見られるもので、先に述べた頭部や胸部の特色とともに、本像が九世紀ないしはそれを去ること遠くない頃の制作らしいことを物語っているようである。

(久野 健)